



- 巻頭言『新年のご挨拶』
藤が丘病院 病院長 眞田 裕
リハビリテーション病院 病院長 嶽山 陽一
- 『救急・集中治療部門がリニューアル中です』
- 『感染管理室より』
- 『藤が丘病院・リハビリテーション病院
地域合同防災訓練』
- 『その他院内行事について』
-2012年11月~2013年1月-
- 『ボランティア募集について』
- 『診療統計』 2012年11月・12月

巻頭言 『新年のご挨拶』 ー藤が丘病院ー 病院長 眞田 裕



ジェットストリームの偏移の為か異例の寒波と共に巳年が明けました。皆様に新春のお慶び申し上げます。

元旦は炬燵で暖を取りながら藤が丘病棟が今年歩むべき道をぼんやりと考えました。そこで頭に浮かんだことを断片的ですがここに記してみたいと思います。私事で恐縮ですが、私は昨年12月に高齢者の仲間入りをしました。横浜市から介護保険証が届き、早速、介護保険料の納入額も提示されました。社会保障(年金、福祉、医療)のうち、今までお世話になって来たのは医療保険だけでしたので介護保険料を医療保険とは別に納入する事態に直面し、愈々介護保険のお世話になる日も近いのか、と感慨を新たにしました。

当たり前の話ですが、医療保険は病気になればその効力を発揮しますが、介護保険は介護認定を受けて始めてそのお世話になることができます。ヒトが齢を重ねて病気になった時には、医療と福祉の両者を頼ることになります。これを病院からみると、病気の急性期には医療保険を使って病院で患者さんを治療し、病状が安定して高度の医療が必要なくなれば病院から介護療養施設に移っていただくことになります。ちょっと複雑ですが、急性期病院と介護療養施設の間には医療保険でカバーされる“療養病床”を持つ病院があります。そこは長期に療養が必要な状態の患者さんが入院する施設です。藤が丘病院も藤が丘リハビリテーション病院も保有するベッドの全ては医療保険で入院する一般病床です。そして藤が丘病院は患者さんの急性期の医療に重点を置き、藤が丘リハビリテーション病院では急性期を脱した患者さんの回復に重点を置いた治療を担当しています。つまり、両院は患者さんの急性期から回復期までを一貫して診療する体制を採っています。昨年11月には両院共通の“医療連携推進部”が高橋寛副院長を部長として立ち上がりました。これにより、①地元医師会と両院各専門診療科との紹介・逆紹介を促進する ②救急医療センター(救命救急センターと ER)からスムーズに入院していただく ③救急病床や集中治療病床から一般病床へ患者さんの移動を円滑にする ④藤が丘病院と藤が丘リハビリ病院間の患者さんの移動を円滑にする ⑤両院からの退院や他施設への転院を楽に行う、などの業務を一括して行うべく日々努力しています。

青葉区や緑区には医療療養病床と介護療養病床を併せ持つ病院が数多くあり、患者さんの治療から療養までを無理なく継続するためには、これらの施設と藤が丘の両病院との協力体制が必要不可欠です。患者さんの皆様には医療保険と介護保険の二つの制度へのご理解を一層深めていただければと願っております。

本年も皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



新年おめでとうございます。皆様方におかれましても、本年が是非いい年でありますよう心からお祈り申し上げます。

さて、近年、医療環境を取り巻きます状況は年々厳しくなっておりますが、これも一重に未曾有の高齢化社会を迎えた我が国の事情によるところが大きいです。高血圧、糖尿病、高脂血症、肥満等いわゆるメタボ関連疾患に加えて、これらに基づく脳血管障害や認知症、心・腎障害、さらに悪性腫瘍といった高齢者特有の疾患が増々増加の一途をたどり、国民総医療費も天井知らずに毎年一兆円以上の増加をしております。これを何とか抑えようとする厚労省側とより高度で満足いく医療の提供を目指します医療側との果てしないせめぎ合いが本年も打ち続くものと思われまます。

65歳以上の高齢者が総人口に占める割合を高齢化率といいますが、これがもう3千万人を超えて、すでに23%以上となり、4人に1人が高齢者という世界一の国になっています。65歳以上を高齢者としたのが、かのプロシアの鉄血宰相・ビスマルクで、年金支給に際して決定したといわれています。しかし、今の時代、65歳を自身で老人と思っている人はどれくらいいらっしゃるでしょうか。現在60歳以上の7割の方は、65歳以降も働きたいと考えておられます。我が国では、男子の平均寿命は79.6歳、女子は86.4歳ですが、健康寿命はそれぞれ平均で7年ほど短く、その間家族や周りの人たちのお世話になっていることとなります。現在、65歳以上の要介護認定者は469万人と、一人暮らしをしている人とほぼ同数で、今後一歩的に増えていくのは明白です。

あまり明るくない話に終始して誠に恐縮の限りに存じますが、こういった日本の現況を踏まえて、いざ藤が丘リハビリテーション病院のこれからを考えてみますと、数多の合併症を携えたご高齢の患者様をより多く受け入れ、効率的に有効なリハビリを速やかに実施して、1日も早くご自宅やご施設に復帰して頂くことを念頭に、職員一同一層の努力を重ねていく所存でございますので、どうぞ本年もよろしくお願い申し上げます。

『救急・集中治療部門がリニューアル中です』

救急医学科 准教授 林 宗貴



救急医療センターの外来部門を開設いたしました。

昨年からの診療機能を維持しながら救急・集中治療部門の改装を行っています。

平成24年12月27日、ER(初期・二次救急)と救命救急センターの初療室(三次救急)が、同じエリアで診療を開始しました。このことにより、当院の救急医療センターの外来部門が1つのユニットとして機能することになりましたので御報告申し上げます。

この改装を要約しますと、①救命救急センター35床が集約して救急医療センターの入院部門が3階にまとまりました。②集中治療センターが14床に増床する工事を終わりました。今回、③救急医療センター外来部門が1つのユニットとして稼働しました。さらに④手術室の改修、⑤救急医療センターのCT室を移設してCTを更新し、⑥救急医療センターの玄関を改装します。病状を説明するための面談室も設置し、待合スペースも整備されます。

この救急・集中治療部門のリニューアルは、救急医療に係るチーム医療が効率化することで、地域の救急医療に貢献することや患者本位の救急医療を強化できます。また、CCU(集中治療センター内に設置されている循環器疾患の集中治療室)やSCU(脳神経センターに設置されている脳卒中の集中治療室)など専門的な治療と円滑に連携できるため、迅速かつ良質で、安全な救急医療が展開できます。

改装工事は間もなく完了しますが、救急医療センターの機能は、継続してリニューアルしていきます。効果的な医療を行う上で、機能的な構造や機器・人員の配置は重要です。しかし実際の医療は、それらを運用する体制だと思えます。より良い体制を見極め、必要に応じてリニューアルしながら、「昭和大学藤が丘病院の救急医療センターに搬送されたのなら安心だ」と言っていただけのような救急医療センターを目指し、日々研鑽を積んでまいります。

(左から2番目が池田室長)



明けましておめでとうございます。今回は、来院される患者さんが安心して治療を受けて頂けるよう、日々感染制御の活動している感染管理室を紹介させていただきます。

院内の感染制御は、近年の高度に複雑化した医療における安全対策の柱のひとつとなっており、耐性菌や輸入病原体の増加に従い重要性が高まっています。当院では2004年から感染管理室を組織し、感染制御の最前線を担っています。感染管理室はインフェクションコントロールドクター(ICD)、感染管理認定看護師(ICN)、感染制御認定臨床微生物検査技師(ICMT)を中心とした感染制御に精通した多職種のメンバーから構成されています。これらのメンバーは、病院長直属の組織として院内の感染制御の実務を担当しており、各病棟や部門に配置されているリンクドクター(医師)とリンクナース(看護師)で構成される感染制御委員会(ICM)と密接に連携しながら「院内で生じる感染症を適切に制御し、患者さんと職員を守ることを使命として日々活動を行っています。

具体的な活動としては、感染管理室専任の看護師が院内で発生する感染症についてコンサルテーションを行いつつ、週1回の院内ラウンドを通じて、該当部門の感染防止対策状況、衛生環境整備状況、抗菌薬の適正使用などについて把握ならびに指導を行っています。さらに、月1回のICMでは、感染制御に係る報告をもとに、院内全体で感染対策に関する議論を深めています。

また、耐性菌やインフルエンザ、ノロウイルスなどが発生した場合は、緊急ラウンドを実施し、迅速に現場での情報収集と感染制御の介入するように努めています。

感染制御を適切に行うためには、院内の全ての部門が密接に連携して情報を共有する事が何よりも大切です。昭和大学藤が丘病院およびリハビリテーション病院では、各部門の風通しの良さ、フットワークの軽さを武器に、来院される全ての患者さんが安心して治療に専念出来るよう感染制御活動に取り組んで参ります。

『藤が丘病院・リハビリテーション病院 地域合同防災訓練』

管理課

《訓練当日について》

平成24年11月11日(日)に藤が丘町会をはじめ青葉四師会(医師会、歯科医師会、薬剤師会、柔道整復師会)、青葉区役所、青葉消防署、青葉警察署、横浜市水道局のご協力により地域合同防災訓練を実施しました。当日は大規模地震発生を想定した訓練(災害対策本部、トリアージ、水道供給、通信、非常食炊き出し)の他、火災発生を想定して、はしご車による救出訓練見学や煙体験を行いました。

両院とも、地域関係機関と協同行う大規模合同訓練は初の試みで、改善点が多く残るところですが、今後とも災害拠点病院としての機能を果たすべく、地域との連携をさらに強化して防災対策や災害医療の充実に取り組んでいきます。

●当日の訓練の様子



『その他院内行事について』 — 2012年11月～2013年1月まで —

《藤が丘病院》



11月14日タリーズコーヒーが1階にオープン

《リハビリテーション病院》



12月22日ボランティアクリスマスコンサートを開催



1月4日2階病棟医療安全かるた大会

『ボランティア募集について』

ボランティア委員会

昭和大学藤が丘病院・昭和大学藤が丘リハビリテーション病院では、ボランティア活動を頂ける方を募集しております。

《活動内容》

● 外来部門(藤が丘病院・リハビリテーション病院)

外来部門で患者さんが困ることについてのお手伝い(場所案内、問診票代筆、車椅子介助、親の受診時の子どもの見守り等)

● 小児病棟部門(藤が丘病院のみ)

遊び相手、学習援助、食事介助(声かけを含め)、イベントの参加等の活動

● ブックサービス部門(藤が丘病院のみ)

外来に常設してあるブックワゴンと病棟巡回用ブックワゴンの整理、補充、管理、病棟移動図書活動

● 一般病棟部門(リハビリテーション病院のみ)

看護師の指導のもと、患者さんとのコミュニケーション活動



《ボランティアサマーコンサートの様子》

《活動曜日・時間》

● 活動曜日 月曜日～金曜日(平日)

● 活動時間 外来部門 9:00～11:30、小児病棟/一般病棟部門 10:00～17:00、ブックサービス部門 9:00～13:00

※その他ロビーコンサート等も随時調整しております。活動時間は、上記時間帯の中で、皆様のご都合のよいお時間に活動頂いております。くわしくはボランティア係(代表:045-971-1151よりボランティア係を呼び出し)へお尋ね下さい。

『診療統計』 2012年11月・12月

	藤が丘病院		リハビリテーション病院	
	11月	12月	11月	12月
外来患者数	29,916人(1,300.7人)	33,133人(1,380.5人)	5,675人(236.5人)	5,404人(225.2人)
入院患者数	15,286人(509.5人)	14,835人(494.5人)	5,448人(175.7人)	5,435人(181.2人)

2012年11月～12月()内は1日平均

《編集後記》

藤が丘病院では昨年より病院機能強化の為、院内各所で改修工事を行っており、今年も継続しております。ご来院、ご入院中の皆様にはご迷惑をおかけするかと思われますが、引き続きご理解とご協力の程お願い申し上げます。

寒い日々が続き、感染性胃腸炎、インフルエンザが猛威を振っておりますが、病院全体で感染予防対策を行ってまいります。この一年の皆様のご健康を祈念するとともに、本年も「病院だより」ご愛読の程、よろしくお祈り申し上げます。

小野寺 正則

《編集委員》

三邊 武幸	吉村 吾志夫
谷山 松雄	池田 裕一
田口 清	高橋 良昌
西山 謙一	上ノ宮 彰
吉原 利栄	伊藤 久美
高橋 良治	庄司 博
久保田 浩司	小野寺 正則(順不同)